

風呂場の秘密

野村胡堂

一

その頃の不忍しのばずの池は、月雪花の名所で。江戸の一角の別天地として知られました。池の端に軒を連ねた出逢茶屋であいちやは戯作げさく、川柳にその繁昌を伝える江戸人の情痴じょうちの舞台ですが、池のほとりを少し西へ取って茅町かやちよう一丁目、二丁目へかけては一流の大町人、大藩の留守居など、金を石ころほどにも思わぬ人達の寮りようや妾宅しやうたくなど、不気味な静けさと、目に余る贅沢さで、町家に立ちまじって五軒十軒と数えられます。

その寮の中でも。湯島寄りに建っているひとときわ目立った構えは、横山町の金物問屋鹿野屋文五郎かのや ひかえやの控家ひかえやで、そこに主人の文五郎は、女房のお八尾やお、その弟の駒吉の外に、二人の妾めかけお関、お吉とともに、同じ屋根の下に、豪勢で、不倫で、贅沢おそで、惧おそることを知らぬ暮しをしているのでした。

その妾の一人、お関というのが、自分の部屋、――池に面した二階の六畳で、自分の喉笛を掻き切って死んでいたのです。

時は八月十六日の夜、主人の文五郎は、横山町の店へいつてその日は帰らず、若い番頭の源助というのが、店から主人の言伝ことづてを持って夜遅くやって来ましたが、ちょうど、二人の妾お関とお吉の、深刻しんこく極まる撈むしり合いの仲裁をして、用心棒代りに泊り込んだ晩の出来事だったのです。

翌る十七日の朝、下女のお兼が、階下したの部屋の掃除をして、

「あッ血！」

天井から漏れて、斑々と畳を染めている赤黒い血溜りに胆を潰したのも無理のないことでした。

「何んだ、騒々しいじゃないか」

頁つ先に廊下から顔をだしたのは、内儀の弟の駒吉でした。もう三十に手のとどく立派な男ですが、立派過ぎて世間に通用せず、姉の厄介になって、良い若い者の癖に、この寮の用心棒代りに飼われております。

というのは、智恵も弁舌も人並以上にできており、顔立もそんなに醜くはありませんが、生れながらの頑固で、酒も吞まず煙草も喫わず、女遊びは言うまでもなく、物見遊山にも行つたことのないという変り者で、朝から晩まで一と間にこもつて、古聖賢の有難い経書史書から、黄表紙、好色本、小唄、浄瑠璃本までを涉りつくし、智恵と理窟が内証して、滅多に俗人とは口もきかないという恐ろしい偏屈人になってしまつていたのでした。

「あつ、二階じゃないか」

後ろから首を出した、若い番頭の源助は、早くも事情を察して、梯子段を二つずつ踏んで、二階へ飛び上がります。

これは駒吉より三つ四つ年上ですが、商売で叩き上げているので、理窟よりは行動の方が早く、駒吉が首を捻っている間に、その血の滴り落ちたもと——二階のお関の部屋に事ありと見たのでしよう。

「わッ、大変。お関さんが」

唐紙を開けて、敷居際へ突つ立つたまま、源助は怒鳴りました。六畳の小意気な部屋で、寝具の贅も眼を驚かしますが、中はまさに血の海、妾のお関はその中に、自分の布団の上にあおむけに倒

れ、あら、もない姿で、ときれているのです。

騒ぎを聞いて、一と間おいて隣りの部屋にいるもう一人の妾のお吉と、階下にいる本妻のお八尾、それに下男の半次まで飛んできましたが、お関の死体の凄まじさに近寄り兼ねたものか、それとも、日頃の憎しみがそうさせたのか、一人として進んで介抱する者もなく、しばらくは真っ蒼な顔を見合せて、黙りこくって、相手の出ようを見るばかりです。

やがて、気を取直したらしい下女のお兼は、年嵩らしく真っ先に入って行って、床の上に血塗れの死体を抱き起しました。傷は左の喉笛に一カ所だけ、血潮に汚れてはおりますが、死顔は思いのほか穏やかで、身扮は昼のまま。あおむけになって足を投げ出して、ほかに、大した崩れもありません。

二

「親分、こいつはたった一と眼で殺しとわかりましたよ。自害のように見せかけてはいるが、馴れた眼で見ると決して自分でやったものじゃありません」

ガラッ八の八五郎が、明神下の銭形平次の家へ、こう報告して来たのはまだ朝のうちでした。

「どうして自害でないとわかったんだ。後学のためにそいつを聴かしてくれ」

平次は緩々として、相変らず粉煙草に親しんでおります。

「第一ですよ、若い女が——と言ってもお関は二十五の年増だが、ともかく人の妾でもしようという色気のある女が、いかに死んで

行く者の、恥も外聞もないと言ったって、床の上に大の字になって出来のいい大根のような足を二本、自分の枕の上に載つけて息を引取るということがあるでしょうか」

「大分当てられたようだな」

「そうでもありませんがね」

八五郎は長なンがい顎あごをブルンと振って、手の甲で額を叩くのです。

「それから、第二てえのを聴こうじゃないか」

平次は先を促うながしました。

「その第二が大変なんで——死んだお関は、血染の匕あいくち首を左の手に持っていたとしたらどんなものです」

「左利きじゃなかったのか」

「飛んでもない。左にお腕を持つのが精いっぱい——右手に箸はしを持つから仕方がないと言った女で」

「それっきりか」

「第三がありますよ、——前の晩もう一人の妾お吉と、大喧嘩をしていますよ。撈むしる、引つ搔く、撲ぶつ、蹴ぶるの大騒ぎだったそうで」

「取逆とりさか上のぼて自害するということもありそうだぜ」

「それも考えましたが、お吉の部屋の唐紙の引手にほんの少し血が付いていて、二階に寝るのは、お関とお吉だけというのは面白いじゃありませんか」

「梯子段は？」

「たった一つ」

「それで、どうしたのだ。あとの始末は」

「お吉の身柄を町役人に預けて、ともかくも親分に知らせに飛んで来ましたよ。——お吉を挙げようと思いましたが、面が綺麗なくせにビンシャンして始末にいきません。殺された方のお関は、武家出のくせに弱気でおとなしい方だったが、お吉は商売人あがりで、人を喰っているから、手におえませんよ」

ガラッ八の勇猛さでも、この雌豹のような美しい驛婦にはかなり手古摺ったようです。

「行ってみよう。お前を甘く見るわけじゃないが、どうも氣になつてならねえことがあるよ」

「へエ？」

「例えばだよ八、——そいつは自害でなくて殺しで、死んでから、下手人が死体にヒ首を握らせたとお前は言うつもりだろう」

「それに違いありませんよ」

「下手人はお吉だとも言ったね」

「その通りですよ」

「女が右と左を間違えるだろうか、死骸にヒ首を握らせるのも、三月の雛人形に、扇や鉋子を持たせるのも同じことだ。下手人が男ならともかく、女はそんな間抜けな間違いはしない筈と思うがどうだい、八」

「——でしようか」

「行つて見るほかはない。検屍前に一と眼見ておけば、飛んだ役に立つだろう」

平次はどうとうこの怪奇な事件に首を突っ込むことになつてしまいました。

池の端へいつて見ると、ツイいま検屍が済んだばかり、役人は引取って、葬とむらいの支度を始めるところでした。

店口にぼんやりしているのは、内儀の弟の駒吉、八五郎の報告で偏屈人へんくつとは聞きましたが、無愛想ではあるにしても見たところいかにも恰幅にゆうわのいい、柔和な顔の男です。

「お吉は？」

「お係りのお役人が番所へ連れて行きました」

八五郎の問いに答える調子は、それをひどく気にしているようにも取れます。

中へ入ると、主人の文五郎が迎えてくれました。

「飛んだお騒がせをいたしますが」

五十年輩あぶらのでっぷり肥った脂ぎった男、金も智恵もふんだんにあって、江戸の何大通とやらの一人にも数えられようという、まづ押しも押されもせぬ人柄です。

「店の方は倅に任せきりで、私は滅多に横山町には泊らないのですが、たった一と晩ここをあけたばかりに、飛んだことになりました。尤も、二人は日頃仲が悪うございましたよ。同じ屋根の下に住まわせて置くと、面白くないことばかりなので、近いうちに一人はどこかへ移そうと思っておりますが——」

平次は黙って聴いておりました。この浪費りようしよくと漁色を大した悪いことと思わないばかりか、当り前のことのようにヌケヌケと話している通人の生活が、決して愉快なものではないにしても、十手を持った平次が、それを彼れこれ言う筋合はなかったのです。

部屋の中の血は一応拭き清めてはありますが、検屍が済んだばかりで、死体はそのままになっております。

奉公人たちは遠慮して寄りつかず、内儀のお八尾やおが、弟の駒吉を手伝わせて、この仇敵と言つてもいい妾ねんこのお関の死体を懇ろに世話をしているのは、何んとなく涙を誘う風情です。

「――」

黙礼して死体の側から退いたお八尾は。四十二三の淋しい女で、慎しみ深そうなのも、化粧に縁のない顔も、放埒ほうらちな夫の愛を失つて、忍従と諦らめで静かに生きてゆく典型的な内儀型でした。

平次は死体の側に寄つて、まずそれを今朝発見したときの位置に戻させました。お八尾も駒吉も気の進まない様子でしたが、平次の強い意志に引ずられて、番頭の源助を呼んで手伝わせながら、あられもない姿に復原させます。

血溜りの中にあおむいて、踏みはだけたような姿、枕まくらに乗せた脚あしの不行儀さなど、平次は細かに見ておりましたがやがて、

「八、お前は、この死体は死んでから動かして、布団の上の血溜りに引っくり返したものと思わないか」

「へエ？」

平次の第一の疑問は、早くもこの死体の不自然な姿に向けられたのです。

「それから、――この人は武家の出だと言つたね」

「へエ、その通りで、父親は御家人でしたが、頑固がんこ過ぎて役目を縮尻しゅくじり、浪人をして苦勞をしたとお関は申しておりました」

文五郎は代つて答えました。

「武家の出で、頑固な父親を持った娘なら、自害の方式くらいは

教わった筈だ」

「――」

「この通り、キッチンと坐って、扱帯しじきかなんかで両膝を崩れないように縛った跡がある。喉笛を突いた血が膝をひたして、多分その扱帯を染めたことだろう。――誰がその扱帯を解いたのだ」

「誰も解きはいたしません。けさ見付けた時は、この通りでございました」

番頭の源助は四方あたりを見廻しながら言いきりました。駒吉もお八お尾もそれに異はありません。

「すると、この膝ひざの上――股ももの中程、二寸くらいの幅で、血に塗まみれないところのあるのはどういうわけだ」

「――」

「若い女が自害して、こんな恰好になるというのは嗜たしなみがないにも程がある」

平次の言葉は、いかにも苦々しく響くのです。死体の冒瀆に対する憤怒でもあるのでしよう。

「でも、殺されたものなら仕方がないじゃありませんか、親分」
「いや、殺されたのではない、外にもまだ証拠がある」

八五郎の抗議を、平次は手輕にはね飛ばしました。

「へエ？」

「匕首を左に持換えさせたのは、――恐ろしい悪智恵だ。自害したのを殺しと見せるためだ、持換えさせたに違いないことは、この右手の指と爪つまを見るがいい」

「――」

「爪がひどく痛んでいるし、指も折れているかも知れない。匕首

を握り緊めているのを無理にコジ開けたのだ。それに左手は匕首を持たせてはあるが、確り握しつかにぎっているわけでない」

死後硬直を起した死骸の右手から、無理に匕首を取った形跡は、八五郎にもよく吞込めます。

「――」

「おや、左の手の掌ひらに、かなりの傷があるようだが、昨夜お吉とやらと喧嘩をしたとき、血は流さなかったのか」

「引つ掻きくらいは拵えたでしょうが、血を流すほどのことはなかったようです」

番頭の源助は応えました。

「そいつは、殺した相手と揉み合った証拠じゃありませんか」
八五郎は横から口を容れます。

「匕首を持った手の掌に傷がある――これはむずかしい判じ物だよ。お前が考えたようににも取れるが、自分で自分の喉笛を両手に持った匕首で掻き切る時、手が滑って左の掌をきることもあるだろう。いざ死のうという時だ、それくらいの粗相は氣もつくまい」

「そんなもんですかね」

「股を縛った扱帯しごきを捜せ。それから遺書かきおきくらいはあったかも知れない、――不しの忍ばずの池が眼の前にあるんだ、石も縛って投り込まれた日にはちよいとすぐ見付けるわけにも行くまい」

「――」

「見るがいい、硯すずりには墨を磨すった跡が乾ききらずに残っているじゃないか」

平次はなおも調べをつづけましたが、内儀のお八尾は慎しみ深くて何んにも言わず。二人まで妾を飼って、同じ屋根の下に屈辱



的な生活をしていることさえも、当り前のように考えている様子です。

その弟の駒吉は、さすがに堅い文字も読み物の道理も辨^わえ^きてい^まるだけに、。

「あれは雌^{めす}と雌^{めす}ですよ。本妻の姉さんはお婆さんで相手にもならないが、お関とお吉は若くて達者で奥女中よりもしつこく、ことごとくに嘸^{いが}み合いです。いつかはこんなことになるだろうと思ってはいましたがね」

こんな遠慮のないことを言つてのけるのです。そして姉の夫の文五郎に対して、かなりの根強い反感を持っていることを隠そうともしません。

番頭の源助はひどく要領の良い男で、

「ヘッ、ヘッ。旦那を一人占めしようと思って、喧嘩の絶え間は

ありませんでしたよ。昨夜も旦那の言伝を持って来てすぐ帰ろうと思いましたが、若い女が二人で撈り合っているのを見ると、放って置くわけにもまいりません。何しろお関さんは弱気でも武士の娘で、お吉さんは貧乏人の子でも、恐ろしく強氣と来ているでしょう。——それに、これは内証ですが、近頃は旦那も若いお吉さんの方が好きになったようで、お関さんはひどくヤキモキしていましたよ。ヘッヘッ、うるさいことで」

すべてを茶にしたような態度です。

下男の半次は五十がらみの無口な男、何を訊いてもらちがあかず、下女のお兼は、出戻りの四十女で、

「お関さんは萎れ返ってましたよ、——いつ旦那に捨てられるかもしれないって、——昨夜だの喧嘩だって、おとなしいお関さんの方から仕掛けたようなものです。でも喧嘩となると勝負は決っていました。勝は何時でもお吉さんの方ですよ、三倍も早く舌が動くし、チョッカイだって恐ろしく早いんですもの」

これが平次の聴いた全部です。

戸締りは嚴重で、素より外から曲者の入った形跡はなく、お吉が殺したのでなければ、自害ということに違いありません。

平次は歸りに湯島の番所に廻って、お吉にも会って見ました。

これは二十一という咲きこぼれそうな妖艶な女です。

「あら銭形の親分さん、どうかして下さいよ。私は何が面白くて。あんな薄汚い婆アのお関などを殺すものですか、あの人はもうお払箱になる筈だったんですもの。殺されれば私の方ですよ。こんな馬鹿馬鹿しいことがあるものですか」

と言った調子で、四方あたりの空気も、人の見る眼もかまわずに銭形

平次に満身の媚こびを投げかけるのでした。

「八、お係に申上げて、この女を返すがよい。お関は間違いもなく自害だよ。それに変さいくな細工をして殺しと見せかけ、お吉をからかった人間があるだけのことだ。いいか」

平次は背を見せました。

「あ、銭形の親分。さすがは親分ねえ、お礼を中上げますわ。身に覚えがなくなつて、縛られて面白いわけじゃない」

お吉はその後ろから、際限もなくお世辞こじと媚こびのあやかしの糸を投げかけるのです。平次はそれを聴き流して、ぼんのくぼがむずがゆく帰って行くのです。

四

それから十日ばかり、お関の初七日も過ぎて、平次はツイこの不思議な詭計トリックのからんだ事件を忘れかけていると、

「さ、大変ッ、親分」

ガラッ八の八五郎、足も空に飛んできたのです。

「今日あたりは、お前の大変がきそうな空合だと思ったよ」

平次は夕立模様の空を眺めて、こんな呑気なことを言うのです。

「ヘッ、そんな呑気な話じゃありませんよ。御存じの池の端かの鹿

野屋のやの寮——」

「お化けでも出るのか」

「お化けくらいは三杯酢すで喰いそうな、あの達者な妾のお吉が、裸はだか体で不忍の池に飛び込んで死んでいるから驚くじゃありませんか」

「昨夜は真っ暗で暑かったぜ。泳ぎに入って、溺れたのじゃないか」

「あの辺は浅過ぎて死ねませんよ。人足を入れて、仏様を引揚げるとき見ると、臍へそを越すのがせいぜいで」

「さてはお関の幽霊に引き込まれたか」

「冗談じゃありませんよ——腹一杯の水を呑んでいるから溺おぼれて死んだに間違いはねえが、いかに暗い晩でも、若い女が裸になって、不忍の池に飛び込むのは変じゃありませんか。その上中腰になつてうんと水を呑んで溺れるなんてのは色気がなさ過ぎますよ」

「着物はどこに置いてあつたんだ」

「質しちの値を氣にしたように、岸の枳殻垣からたちがきに引っ掛けてありましたよ、——何しろ池の端一番という、あの綺麗なのが素っ裸で池の中に浮んだんだから、こいつは年代記ものだと、本郷から下谷へかけて、大変な騒ぎですよ」

「では、俺も行って見るとしようか」

「へッ、へッ、飛んだ眼の保養で」

「馬鹿なことを言うな」

平次は八五郎の冒瀆ぼうとく的な言葉いましを戒めて、池の端に立ち向いました。

お吉の死体は鹿野屋の寮に引取って、池の端にはもう弥次馬の影もまばらです。

「あ、銭形の親分、重ね重ねの災難で面目ないが——」

主人の文五郎は小鬢こびんを掻きながら迎えてくれます。

「御主人はゆうべも横山町のお店の方だろう」

「その通りで」

平次はまず、予想が的中しました。

「あれからお吉の様子に変わったことがなかったのかな」

「変ったと申せば。妙にふさぎ込んだり、そうかと思えば急にはしやぎ廻ったり少々取りとめもない風でしたが、まさか、死ぬ気になつていたとは思いません」

美しい妾^{めかけ}、少々は驛馬^{じやしやうま}で、持て余され気味ではあつたにしても、若くて脂^{あぶら}が乗りきつて。申分なく媚態的で、豊満でさえあつたお吉の死は、老醜^{ろうしゆう}の文五郎に取つては諦^{あきら}めきれない未練のようです。

鹿野屋の寮の中は、さすが打ちしめつておりました。お吉の死体は手軽に検屍が済んで、階下の六畳に寝かしてありますが。さすがに手が廻り兼ねて、まだ入棺^{にゆうかん}していないのは、幸せでした。仏様の前を飾つて、まめまめしく供養しているのは、相変らず淋しそうな本妻のお八尾^{やお}です。二人の愛妾^やがつづけざまに死んで、自分だけ取り残されたことが、この内儀^{のうぎ}に取つて、嬉しいことなのか、それとも悲しいことなのか、お能^{のう}の面のような顔には、少しの感情の動きもありません。

平次は一と眼死体のゆがみを見て、ハッと息を吞みました。浅い池の中に飛び込んで、中腰になつて死んだせいかどうか知りませんが。からだ全体に、何んとも言えない不思議なゆがみがあるばかりでなく、第一その顔に現われた苦悩の表情は、容易のものではありません。

普通の水死人の、いやにむくんだ顔は、稼業^{かぎよう}柄平次はあきあきするほど見ておりますが、こんな嘔みつきそうな悪意と、無残な

苦悩をむき出しにした顔を、まだ見たことはありません。それは女が良いだけに、死の破壊がいつそう強調されたせいもあるでしょう。全く二た眼と見られぬ異様な物凄さです。

平次は女の胸から水落ちのあたりを見て行きました。明らかに水は呑んでおります。胃のあたりのふくらみは、殺されてから水に放り込まれたものでないことをあまりにも明かに示しているのです。

「八、あれをどう思う」

「――」

平次は女の髪の毛の異様な乱れと、もう一つ、鼻の頭から、額、前髪のあたりへかけて、ひどく皮膚を摺り剥いた跡のあるの指さしました。

「水の中の石か何んかでやられたんじゃないやありませんか」

八五郎は一向のんきに片付けております。

「とにかく腑に落ちないことが多いようだ。昨夜の様子を、もう少し調べて見よう。」

平次は家中の者に逢って、昨夜の様子を訊ねて見ることにしました。最初は下女のお兼、

「旦那様が横山町のお店に泊るとわかったのは日が暮れて風呂を立ててからでした」

「使いでも来たのか」

「今度は小僧の佐吉どんでした。暗くなりかけてからお店へ帰りましたか」

「寝たのは？」

「真っ先にお吉さんが風呂に入って、――いつもそうですけれど、

お内儀さんは頭痛がすると仰しゃって早く休んでしまい、それから駒吉さんが入って、半次どんと私が入って、順々に寝てしまいました。火を落してから、一度寝た筈のお吉さんが、あんまり汗がひどいから、もう一度流してくると言って、風呂場へ行ったようです。昼の疲れで私もそれっきり眠ってしまいました」

お兼の言うことはなかなか行き届きますが、その語気のうちに、死んだお吉の驕慢な態度に対する非難がこもります。

「それは何刻だ」

「亥刻（十時）過ぎ、亥刻半（十一時）近かったと思います。」

平次はさらに本妻のお八尾、その弟の駒吉にも訊きましたが、下女のお兼の言葉と大同小異で、お八尾はお吉が湯へ入ったのも、風呂場から出て来て、二階へ行ったのも知っているが、家を脱け出して、不忍の池へいったのは知らないと言ひ、駒吉は、お吉が風呂場へ行ったのさえ知らないと言っております。

「その代りお吉が褰の戸を開けて外へ出だのは夢心地に知っております。——子刻（十二時）過ぎだったと思いますが」

「今朝店の戸は？」

「開いていました。変なことがあるものだと思って外を覗くとあの騒ぎです」

と、駒吉は首を振るのです。

もう一つ念のために今朝枳殻垣からたちがきの上にあつたという、お方の着物を見せてもらいましたが、それはお妾らしい派手な長襦袢ながじゅばんで、燃え立つような緋縮緬ひぢりめんの扱帯しごきまでも添えてあるのです。

それからお吉の遺品も調べましたが、あんな女にしては思いのほか金を持っていたことが異様に思われましたが、遺書一つある

わけでなく、押入も手文庫も乱雑で不潔で、この女のだらしのなさを念入りに暴露しております。

「親分、妙に気になることばかりですね」

「お前もそう思うか、——いかに女の無分別でも、腰きりの水中へ裸体で飛び込んで、しゃがんで死ぬのは少し変だな」

「何んか良い智恵はありませんか」

八五郎は腰の十手などを抜いて、妙に四方を物色しております。「ないな、一度帰って考えるでしょうよ。お前は気の毒だがここへ残って、船を出して池の中を捜さしてくれ。鰻搔きのコツでこの辺一带に搔き廻したら、何にか面白いものが出て来るかも知れない」

平次はそれっきり明神下へ引揚げてしまったのです。

五

その日の夕刻、八五郎の『大変』がもういちど平次の住居を驚かしました。

「何んだ八、全くお前と言う人間は付き合いきれないよ」

「いまいまして言う癖に、平次に取っては、この八五郎の忠実さが嬉しくてたまらない様子です。」

「でもこいつは驚かずにはいられませんよ。三輪の万七親分が乗り出して来て、鹿野屋の内儀——あの淋しそうなお八尾を縛って行きましたよ」

「それは本当か」

「池の端の枳殻垣の中——あのお吉の長襦袢を脱ぎ捨ててあった

あたりに女の櫛くしが落ちていたんで」

「誰のだ」

「金で蒔まき絵の入った、べつ甲の櫛、そいつは紛まぎれもなく内儀のお八尾の品じゃありませんか、——あわてた野郎がそれを拾って、ウロウロ池の端をあさっている万七親分に見せたからたまりません。妾めかけを二人殺したのは、本妻の仕業しわざに違えねえと、万七親分は鬼の首でも取ったつもりで、あの女を縛はって行きましたよ」

八五郎の報告には泡あわも飛べば埃ほこりも立ちます。

「そいつは恐ろしい見当違いだ。あの女一人の力で、若くてイキの良いお吉を担かつぎ出し、不忍の池へ投げ込めるわけはねえ。お吉は間違まちがいもなく水を呑んでいるから、池へ投げ込まれる前は生きていた筈はずだ」

「行ってそれを教えてやりましょう。お関とお吉が死んだとき、神妙に線香でも上げてやったのは、あの内儀だけじゃありませんか」

「よしよし、俺もそれを考えていたよ」

平次はもういちど、真夏の夕方ゆふぐの街を明神下から池の端へ飛んだのです。

ちょうど池の端の、鹿野屋の前のあたりまで行くと。平次が八五郎に言い付けて出した小船とびぐちの一隻が、鳶とび口ぐちの先に長い巾きんを引ひかけて、何やら池の中から引出ひくところでした。

「おや？　大きな石を二つ縛はってあるぜ、容易やすには上がらねえわけだ」

人足の男がようやくそれを船の中に引揚げたところへ、折よく平次と八五郎は顔を出したのです。

「親分、変なものがありましたよ」

岸へ漕ぎ寄せて、枳殻垣^{からたちがき}へ引つ掛けたのを見ると、紛れもなくそれは、緋縮緬^{ひぢりめん}の扱帯^{しごき}で、斑々として絞^{しほ}り染^{ぞめ}のように薄黒くなっているのは、泥に交った古い血の凝固^{かたまり}だったのです。

「これだよ、八、お関が自分の膝^{ひざ}を縛ったのは。武家出の若い女は、死んでから取乱さないように、それくらいの嗜^{たしなみ}はある筈だと思つたよ——お関の死んだ後で、あの部屋へ入った人間が、この扱帯^{しごき}を解いてわざと死骸を引っくり返し、ヒ首^{あいくち}を左手に持ち換えさせて、人に殺されたように持えたのだ」。

「なんだってそんなことをしたんでしょう」

「お吉の部屋の入口の引手に血まで塗ったところを見ると、お吉を下手人にしたかったのだろう」

「へエ」

「これほどお吉が怨まれているとわかると、話はだんだんむずかしくなるじゃないか」

「？」

八五郎には何が何やらわかりませんが、平次はグングン鹿野屋に入って行くと、店にいる番頭の源助をつかまえていきなり言うのです。

「風呂場へ案内してくれないか」

「昨夜^{ゆうべ}のまま、まだ湯も抜かずにあると思いますが、何しろこの取込みで」

「その昨夜のままが見たいのだ」

平次は追っ立てるように、店中の環視^{かんし}の中を、まっすぐに風呂場に案内させました。

さすが大町人の寮の風呂場で、それは贅沢を極めたものですが、さすがにたそがれて、窓から入る夕あかりでは隅々までは眼が届きません。

「灯^{あかり}」

と平次が声をかけると、黙って廊下に用意してある手燭^{てしよく}に灯を入れて、風呂場に持って来たものがあります。緊張して少し青い顔をしておりませんが、案外落着いた内儀の弟の駒吉です。

「俺は大変な間違いをしていたんだ、——お吉の死骸の額にひどい摺^すり剥^むきがあった、あれは多分、池の中で石か何んかでやられたことと早合点していたが、今考えると、そいつは恐ろしい見当違いさ」

「――」

「見るがいい、この鉄砲風呂には水が八分目入っている。人間がこれへ入って身体を沈めると、水はちょうど縁まですれすれになるだろう。そのとき誰か風呂場へ入って来て、不意に蓋^{ふた}をして上から押えたら、風呂の中に入っている人間は、首をおおむけにしてもがくに違いない、——すると摺^すり剥^むき傷は頭の上ではなくて鼻から額へつくわけだ、——ところで、上から押える力が強くてとうとう溺^{おぼ}れ死んだとき、下手人はそつと死体を風呂場から担^{かつ}ぎ出し、誰も気が付かぬように外へ持出して、すぐその池の中へ滑り込ませることは何んでもない、——着物はあとで持って行って、枳殼^{からたち}垣^{がき}の上へ投げ出せばいい」

平次はそう言いながら、風呂の蓋を取って、僅かににじむ血の痕^{あと}を見せるのです。

「誰ですそれは？」

八五郎は十手を抜いて、又あたりを物色し始めました。風呂場の中には源助と駒吉、入口には文五郎と半次とお兼の顔が覗いております。

「お関の膝の扱帯しじきを解いて、ヒ首を左手へ持ちかえさせた奴だ」
「？」

「女ではない、力のある男だ。お吉ほどの丈夫そうな女が、死物狂いになっても。下から風呂の蓋を撥はね上げられないほどの力のある人間だ」

「内儀のお八尾は？」

「内儀ではない。内儀はそんな力がない」

「枳殻垣に落ちていた櫛くしは？」

「内儀は伶俐な女だ、お吉を誰が殺したか知っているのはあの内儀だけだ。いつかはお吉が身投げではなくて、殺されたのだと分るかも知れない。そのとき下手人を縛らせるのが気の毒だから、万一のとき俺たちを迷わせるために自分の櫛を垣の中へ投り込んで置いたのだ、——あの内儀はそう言った女だ」

「お内儀が庇ったのは誰です、親分」

八五郎はますますせき込みます。

「八、後ろを見るがいい、自首して出る気だ。縄にも及ぶものか」
八五郎はハッと後ろを振り返ると、流しの板敷の上に、手燭を持った駒吉が、崩折れたようにしゃがんでいるではありませんか。「恐れ入りました。銭形の親分、姉が縛られたとき、名乗って出なかったのは、未練なようですが。私は三輪の親分の手柄にしたくなかったんです」

駒吉は流しに手を突いたまま言うのです。

「お前は四角な字も読めるということだ。なんだってこんな無分別なことをしたんだ」

平次はその前にしゃがみました。弟に意見でもしている調子です。

「姉が可哀想でした、——同じ屋根の下に妾めかけ二人と一緒に暮して、焼餅らしい顔もしてはならないように馴ならされた、姉が気の毒でなりませんでした。——それに、あのお吉という女は唯の女じゃありません。お関もとうとう、あの女にさいなまれて自害をする気になりました。放って置くと今度は、姉がやられるに決っております。血を分けた弟の私には、あんなに取済まして静かにしている姉の胸のう치가火のように燃えているのがよくわかります」
駒吉は観念しきった態度で。何も彼もブチまけるのです。

「お前はお吉を殺す気でこの風呂場へ入って来たのか」

「飛んでもない、——私は凡夫ほんぶでございます。憎い憎いと思いつづけながら、あのお吉の妖あやしい美しさに引かれました。お吉はまたそれが面白くてたまらなかったのです。私はフラフラと来て、憑つかれたように風呂場の戸を開けてしまいました。すると。風呂桶おけに入って美しい半身を見せて突っ立っていたお吉は——」

「驚きもすることか、にっこり笑って、——からかい面に流し眼をくれたまま、後ろ向に風呂の中へ身体を沈めたのです」

「——」

「私は三十のこの歳まで、女遊び一つしたことのない人間です。私は学問と理窟りくつで自分をさいなみ続けて来ましたが、昨夜ゆうべという昨夜は、とうとうお吉の阿魔あまに負けてしまいました。私は前後の

考えもなく、夢中で風呂の蓋を取って、あの女の頭の上に冠かぶせてしまったのです。——私はあの女を殺してしまいました。——でなければ私は、何をやり出したかわからなかったのです。姉が私を庇かばおうと思って余計なことをしてくれなければ、私は知らん顔をしていたかも知れません、——風呂の中からニツコリしたあの女の美しい顔に取憑とりつかれながら、——」

駒吉は言いおわって崩折れてしまったのです。

「よし、よく言った。俺はお吉を殺したお前より、金のあるに任せて、妾を二人も飼い、女房と同じ家に住まわせて、通人氣取りで脂下やにさがっている狒々のような小汚い野郎を縛りたいが、そうも行かないのが十手を預かる悲しさだ。本来なら三輪の親分の手柄にして、俺は澄まして引揚げたいところだが、それじゃお前も浮ばれめえ。今度はお奉行所までもついて行って、俺の手柄に代えてもお前の命乞いをしてやる。サア」

「立てッ」

八五郎は怒鳴りましたが、その声は妙に濡ぬれておりました。

文五郎はコソコソと姿を隠した様子。夏の夜の池の端には、野

次馬が一パイ犇ひしめきます。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

本作品の初出は底本では「昭和十九年書下し」となっています。「讀物時事」昭和二十四年九月号に本編が掲載されていることを現物で確認していますが、それ以前に初出があった可能性は残っています。

挿絵―萩 柚月

初出―「讀物時事」昭和二十四年九月号 時事通信社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部